



自然大学 第 30 期が開講しました

自然大学学長 渡辺弘之

自然大学は 30 期の受講生を迎えて、4 月 6 日開講しました。開学後 30 周年になります。自然大学の伝統・カラーは定着しています。座学では地球環境と人間、森林、水域、大気、土壌、森林動物といった自然・森林と密接な環境条件などについて学び、自然大学で重視する野外実習では海（岬町・長崎海岸）、照葉樹林（奈良・春日山）、夏緑林（金剛山）、淡水湖（琵琶湖博物館）、野鳥観察では山田池を訪れ、馬ヶ瀬山（滋賀・北小松）では間伐の実習、ブナ林（芦生）は紅葉の中、楽しい 1 泊旅行です。

年齢も経歴・経験も異なる人々が仕切り直しをしてともに学ぶのです。自分で学びたいと、自分の意思で参加されたのです。もちろん、これまでの経歴・経験もあり、座学でも、あるいは少し戸惑うことがあるかも知れませんが、そこにはやらされた勉強とは大きくちがうものがあるはずです。わからないことは納得できるまで、質問しましょう。

長崎海岸や琵琶湖の実習では海や湖の生き物の豊かさに感動し、芦生での 1 泊旅行では森林のもつ底知れぬ魅力を感じます。「自然と緑」が行っている里山整備、自然観察会などの多様なイベントへも申し込みをすれば参加でき、歓迎してくれるはずです。楽しく学びましょう。



NPO法人 自然と緑 初代理事長の石原忠一氏が永眠されました

初代の自然と緑理事長そして自然大学学長として、長年ご尽力された石原忠一様が逝去されました。2024 年 11 月享年 99 歳、お知らせいたしますとともに、ご冥福をお祈りいたします。（p7 に追悼文）

—142号目次—

p 1	自然大学 第30期が開講しました	自然大学学長 渡辺弘之
p 2	さいとうさんの“話のタネ” (69) お茶は魔除け	前自然と緑理事長 齊藤侑三
p 3~4	渡辺弘之の未解決事件簿 (24)	自然大学学長 渡辺弘之
p 4	「これなんだろう・何故だろう」	自然と緑理事長 伊藤孝美
p 5~6	第29期自然大学実習感想文（抜粋）金剛山	第29期自然大学受講生
p 7	初代理事長・自然大学学長 石原忠一氏を忍ぶ	自然と緑理事長 伊藤孝美
p 7	会報川柳	自然と緑事務局 神崎トモ子
p 8	「これなんだろう・何故だろう」の答	自然と緑理事長 伊藤孝美
p 8	寄付等の御礼 活動報告／編集雑記	自然と緑会報編集部

さいとうさんの“話の種” (69) お茶は魔除け

前自然と緑理事長 齊 藤 侑 三

夏も近づく八十八夜・・・と謡われた「八十八夜」。立春から 88 日目が八十八夜、春の始まり、1 年の始まりの日と言われている。

2024 年大河ドラマは「光る君へ」の放映で「ゆかりの地に行きたい」との要望から宇治上神社から平等院、表参道の三星園上林三入本店を訪ねた。

宇治茶資料室では宇治茶の歴史が、江戸時代の将軍御用のお茶壺道中がある。「ズイズイ ズッコロバシ ごまみそズイ 茶壺におわれて トッピンシャン・・・」このわらべうたは、お茶壺道中を風刺した歌ともいわれている。「宇治は茶所、茶は政所、娘やるのは縁所」と面白い謂われなどある。※(さいとうさんの自然観察の話の種 2)119 頁「政所」を書いている。



タイのアッサム茶

植物名の「茶」は、加工法により緑茶、抹茶、煎茶、紅茶、ウーロン茶、プーアル茶と色々ある。

茶の木は中国で発見された「中国種」とインド北東部のアッサム地方で 1823 年に発見された「アッサム種」がある。アッサム種は中国種と比べ葉が倍くらい大きく、熱帯でよく生育する。

タイでアッサム茶の天日干しを観察した。ナラガシワの葉位の大きな葉で紅茶として世界に知れ渡っている。

毎日新聞 (2010 年 5 月 10 日) に『チャノキはツバキ科ツバキ属の常緑樹。緑茶や紅茶など茶葉を使う飲料はさまざまだが、いずれもチャノキというたった一種の植物から作られる。その原産地の中国南西部の雨の多い



タイのアッサム茶

森では、樹齢 1000 年以上というチャノキが数多く見つかっている。右の写真は、雲南省南部の山地に生える樹高 25m のもの。根元で 3 本に分かれるこの大木は、1700 年前に人間によって栽培されたという。』[文・写真 = 小林尚礼 (山岳写真家) を参考]。



チャノキ 1700 年前に植栽

この記事は、本当かな? と思ったほどの巨木で、現在見るお茶の木とは想像が出来ない。日本の茶は矮性種だろう。

☆余談だが小石川植物園 (2003 年) でベニバナチャ (紅花茶) を見た。ツバキ科の植物だから紅花があっても不思議ではないか・・・

2016 年の新聞記事に 2100 年以上前の中国皇帝の墓から、世界最古のチャノキの植物遺物を発見。中国では 5000 年前の紀元前からお茶の歴史が始まっているのだ。

日本の茶の歴史に平安時代に中国から遣唐使や僧によって種子が持ち込まれたがすたれ、時は流れ鎌倉時代、栄西が中国の修行で「茶は養生の仙薬」と「不眠覚醒作用」が禅の修行に必要とした。栄西は中国から種子を持ち帰り、京都母尾の高山寺の明恵に寄贈して、栽培を始めたのが日本最古の茶園とされている。これが宇治に移されて宇治茶の起源となった。

お茶は寺院を中心に広がり、やがて武士階級にも社交の道具として広がる。江戸時代には一部の庶民にも茶が広まった。室町時代に茶の実を煎じ汁が染料として使われるようになりこれが「茶色」の名になった。

私は、自然観察の案内のときに、お茶は「魔除けの薬だった」といっている。

「昔アラブのお坊さんが・・・」という「コーヒールンバ」という歌謡曲が流行った。はげしい宗教的修行の祈祷と瞑想に耽るときに魔におそわれないことと、疲労を癒やすために飲んだ。修行の邪魔をする“魔”。魔は「睡魔」のことだ。「お茶を飲んだら眠れない」と言う人がいる。お茶もコーヒーも「睡魔退散の効用」があった。睡魔退散の仏具に「独鉢」「三鉢」「五鉢」がある。これも魔除けの道具だ。仏具は睡魔が襲ってくると、あぐらをかいた太ももを「ド突く」これは痛いが一発で目が覚める。

私は地図作成をしているので、茶畑の地図記号よく見る。お茶の実実は 3 粒ほど入っていて、地図記号は実が並んだ形に由来している。



茶の実



地図記号

丹波に一丈五尺 (4.5 m) の大ミミズ

江戸時代 (正徳 2 年、1712) に出版された寺島良安『和漢三才図絵』の中にミミズ (蚯蚓・美々須) の記載があり、その中に丹波国柏原 (かいばら) 遠坂村で暴風の後、山崩れがあったあと、一丈五尺 (4.5m) と九尺五寸 (2.9 m) の大ミミズがでてきたと書かれている。大きなものだ、一体、何をみたのだろう。雨の後の崖崩れなどで深層性の大きなミミズが時にでてくることがある。この一丈五尺の大ミミズの話、伝説ではあるが、私には日本にも大きなミミズがいたことは確かなことのように思える。

1878 年 2 月号のネイチャー (Nature) に掲載された南アメリカのミンホカオ (Minhocao) は何と長さ 50 ヤード (45.7m)、胴回り 5 ヤード (4.57 m) だったという。倒れた巨木としか思えないが、実際にはミミズが通った痕という溝からのうわさだったらしい。夜になりこれが通ると遠くで雷がなるような音がし、地面の揺れを感じたという。東洋でも朝鮮の歴史書『東国通観』に太祖 8 年 (925) に高麗の宮城前に現れたミミズは 70 尺 (約 21 m) だったという。ミミズは呼吸器官をもたない皮膚呼吸の動物、すなわち、皮膚を通して酸素を吸収するので、ヘビのように太いもの、ましてや胴回り 5 ヤード (4.57m) などというミミズは存在し得ないという。

確実に現存する大ミミズは南アフリカにいるヒモミミズ科の *Microcaetus rappi* で、1937 年トランスバール州で見つかったものは長さ 7 m、太さ 2 cm、1967 年ケープ州東部で発見されたものは 6.4 m、標本にして 3.35 m であったとされる。オーストラリア東南部にいるフトミミズ科の *Megascolides australis* が長さ 3.7m、太さ 2.5 cm とされ、メルボルンにある世界唯一のミミズ博物館に 5.9 m の写真が展示されている。オーストラリアにも大きいものがあることは確かだ。

1993 年 6 月、オーストラリア南部の Adelaide にある土壌学研究所へ招待されて行った。「何か希望は」と聞かれ、「大ミミズを見たい」といったのだが、「これはオーストラリア東南部だけに分布するもので、この南部の乾燥地にはいない」といわれた。

メコン河の長いミミズ

チベットに源を発し、南シナ海に注ぐ全長 4,359 km とされるメコン河のタイとラオスの国境、ラオスの首都ビエンチャンとタイのノンカイとの間のメコン河畔に長さ 3 m だが、細いメコンオオミミズ (*Amyntus mekongianus* = *Promegascolex mekongianus*) がいる。2015 年 11 月、ミミズ研究談話会メンバーで調査にでかけ、生息地を確認、捕獲に成功した。参加者は大喜びであった。水生のジュズイミミズ科のものかと思ったが、陸生のミミズの仲間であった。しかし、尻尾を砂地にだし、からだは水中にあった。もって帰った標本だが、その長さを展示するのに長さ 3 m の特注のガラス管が必要であった。



メコンオオミミズ

日本の大ミミズ

現在、日本では大きいものはシーボルトミミズ、シマフトミミズ、ヤンバルオオフトミミズ、ヨナグニオオフトミミズなどで、長いものはハッタミミズだ。シーボルトミミズ (*Metaphire sieboldi*) は長崎出島のオランダ商館の医師として滞在していたシーボルトが持ち帰った標本で日本のミミズで初めて学名がつけられたものだが、その種小名が *sieboldi* であることから、和名がシーボルトミミズとされたものである。

親指くらいの太さがあり体長 30 cm、体重は 45 g もある。青藍色の金属光沢があり、よく目立つミミズである。紀伊半島・四国・九州の太平洋岸でよく見られ、四国ではカンタロウと呼ばれる。たじまゆきひこ (田島征彦) の子供向けの絵本『みみずのかんたろう』(くもん出版、1992) もこのシーボルトミミズが主人公だが、なぜカンタロウなのか、カンタロウって何? と調べてみたが、まだ、わからないでいる。



シーボルトミミズ

そこへ、1977 年、奈良県十津川村杉清から、さらに、1991 年、隣接の大塔村赤谷から当時奈良教育大の学生であった吉田宏・浜崎誠三さんによってシーボルトミミズより大きく体重 60 g にもなるピンクのミミズがもちこまれた。ミミズ研究談話会会員を動員しての大搜索などを実施し、2008 年、十津川村杉清でつい

に2匹目を私自身で捕獲した。シマフトミミズ (*Amyntus shimaensis*) 同定されたが、新種記載以降初めての確認であった。

2000 年、沖縄本島北部ヤンバルからヤンバルオオフトミミズ (*Amyntus yambaruensis*) が新種記載された。これも大きい。さらに、日本最西端の島、沖縄・与那国島に大きいものがあると聞き、2019 年 5 月、これもミミズ研究談話会で搜索し生息地を発見した。体重は 72 g にもなる、重さではこれらが一番大きい。

これをヨナグニオオフトミミズと仮称し、新種記載を準備していたのだが、台湾のミミズ研究者によって、2021 年、台湾に分布する大型ミミズ *Metaphire formosae* の仲間の新種 *M. dunan* として記載された。先をこされてしまったが、採集されたのは 2011 年とのことである。dunan は与那国島は与那国方言で「どうなん (dunan) ちま」と呼ばれていた。ここには有名クバ (ビロウ) の葉で巻かれた独特の瓶に詰められた泡盛に「どなん」がある。和名にはドゥナンオオフトミミズとするのが適当かも知れない。

長さならハッタミミズ (*Drawida hattamimizu*) といったが、これは石川県河北潟、福井県三方五湖、滋賀県琵琶湖・余呉湖周辺の水田に生息する細長いミミズで、ぶら下げると最長 96 cm にもなる。しかし、体重はせいぜい 20 g である。下村忠行 (編)『今世聞巻奇聞』(修身舎、明治 20 年、1887) に滋賀県甲賀郡岩室村に長さ 5 尺 (1.5 m) の大ミミズがいて「田畑を害すること甚だし」とある。琵琶湖湖岸近くでなくかなりの内陸であるが、これは現地調査をして、このハッタミミズにまちがいないと確認した。



ヨナグニオオフトミミズ



ハッタミミズ

まだ、何かいる！

ところがである。1970 年当時、大阪堺市上野芝の草の生えた空き地に 1 m のミミズがいた。子供たちで見たのだが、他の子がギャーといって逃げたので、詳しくは見していない。シーボルトミミズのように青光りはしなかったし、縞模様もなかったという。子供のときの話である。大きく見えたかも知れないが、それでも 1 m は大きい。奈良県西吉野村永谷というところに一尋 (両手を広げた長さ) のミミズがいた、埼玉県寄居で 1.7 m のものがいたという。これは大人が見た話だ。

さらには、高知県四万十川の上流北川源流のヨシの生えた細い川に長さ 3 m の大きなミミズがいたと聞いた。これは息子と一緒に見たという。山村で暮らした人がヘビとミミズをまちがえることはないだろう。長さならハリガネムシだがこれは文字通り針金のように細い。これをミミズと見間違えることも考えられない。どれも捕まえてくれれば、一件落着なのだが、「そんな気色の悪いこと、ととてもできませんでした」といわれている。

四万十川上流の話は私が直接聞いた話だ。「気になる、私自身が一度現地へ行ってみる」といったら、「連休に里帰りする、村の人にも確認してくる」といってくれた。連休が過ぎても返事がない。メールで確かめると「村の人に聞いても、そんなもの見たこともない」といわれたので、「あの話はなかったことにして下さい」といわれた。私にはどれも「なかったこと」にはできない話だ。自分で捕まえるしかない。新しい情報をお待ちしている。



金剛山ロープウェイ駐車場横

【これなんだろう・何故だろう】

左の写真はミズキ (水木: *Cornus controversa* var. *controversa*) である。この木は、別名クルマミズキ (車水木) と言われるように、側枝が横に広がってできる円盤が幹を軸として重なった構造を作る。ちょうど五重塔のような印象の構造をもっている。こうした樹形はミズキにかぎらずモモタマナ (*Terminalia catappa*) という熱帯を中心に分布している樹木など、少なくない樹種で見られる。何故このような樹形になっているのでしょうか？

(答は 8 ページをご覧ください)

自然と緑理事長 伊藤孝美

《 1 班 》

○雨と寒さの屋外実習となり、1 班の参加者は小職 1 名のみ、え〜。金剛山での「黒ぼく土」について喜界が島からの 7500 年前の火山灰由来であることを理解した。また、P の少ない痩せた土であること、これが金剛山山頂を覆って、山頂でもスギの植林が可能であったことを理解しました。金剛山は、もともと花崗岩の隆起山でしたが、「火山灰」で覆われることで植生が異なりました。一般に山裾から山頂に向かって、杉、檜、松の植生となりますが、金剛山頂は別扱い。また、杉は枝葉が縦に伸びも杉林は下草が繁茂するが、檜は枝葉が横に広がり下草が生えない状況を 確認しました。また、杉や檜林は間伐をきっちりしないと山が荒れます。特に檜林は下草がないので荒れています。断続的な雨ではありましたが、幸い風は大したことは無く、傘差しでの歩行とりました。今回の解説を聞いて、次回以降の金剛山登山が楽しみとなりました。



スギ・ヒノキ林と河内林業の解説

《 2 班 》

○普段の登山なら中止にするような天気でしたが、皆で植物を観察したり、解説を聞いたりしているとあまり気にならず楽しかったです。ただとても寒かったので、雨天時の登山の低体温症の恐さを感じました。解説の中でブナの木が数百年前に人間のかく乱があった場所にはえているという話が、ブナは白神山地のような原生林にはえるイメージがあったので驚きました。温暖化の影響で生息域が北上していたり、実が結実しなかったり、各地で個体数が減少しているのは悲しいですが、人の力ではなかなかどうにもならない問題なんだと感じました。



ブナ林の生態系についての解説

【コメント】金剛山のブナ林については、生育地が黒ボク土（6,500 年前？、7,200 年前？にアカホヤ火山灰に由来する）であることから、数百年前まで茅場などの草原であったものであろう、ということです。

白神山地には行ったことがありませんので、どのような土壌かは解りませんので、原生ブナ林の成り立ちについてはわかりません。（伊藤記）

《 3 班 》

○今回の金剛山実習では 3 つの気づきがありました。① 白神山地のブナ林は以前から知っていましたが、ブナの木は見たことがなく、また金剛山にそのブナ林があったことに驚きました。②同じ地域に生育するブナの葉が日照時間により大きさが異なる事です。③金剛山の黒ボク土が硫黄島の火山灰から成っていると言う事は今回の実習に参加しなければ知り得ない事でした。

【コメント】ブナの葉が金剛山に自生するものと（自然に生えてきたもの）（太平洋側）と植えられた新潟県産のブナの葉（日本海側、東北など北方型）のものでは大きさ（面積）が異なります。

これは日本海側や東北型は新芽が開いて光合成を始める時期が太平洋側とは 2 週間以上遅く、秋、葉

が黄色くなり、落葉する時期が2週間以上早くなります。ということは光合成する期間が太平洋側では4週間以上長くなりますので、同じ光合成量を得るためには葉の面積が小さくても良いのではないかと考えられます。(伊藤記)

○金剛山に無事登られるか不安な所に、当日はあいにくの雨。でも、説明を聞きながらゆっくり登ったので無事、野外実習を終えることが出来ました。雨の中でも丁寧に説明して下さいました伊藤先生に感謝です。河内林業では真っすぐに伸びるしかない状態にする為に密植し、15年後位から間伐を繰り返すとのこと。良い木材を生産するためには手がかかっているということがわかりました。

○野外実習当日は雨が降り、ちょっとたいへんな自然観察会となりました。ブナには裏日本のブナと表日本のブナ態系を形成していることを学ぶことができました。私の地元の和泉葛城山に生育するブナ林は、ブナ林の南限であるということを以前知りましたが、温暖化が進行する中で、現時点で和泉葛城山のブナ林は最早南限と言えない状況にあるのかどうかということについて知りたいと思いました。

【コメント】和泉葛城山は、ブナ林としては南限に位置しますが、ブナの樹としての南限は鹿児島県は大隅半島の高隈山です。

このブナ林の現況は、和泉葛城山ブナ林保護増殖調査委員を辞退してから10数年経ちますので科学的な状況はよく知りません。しかし、20年ほど委員をしていた頃では、ササの繁茂により実生苗が育たず、若木が少なく老木が徐々にですが枯れて、ブナ林としては衰退の一途をたどっていると見受けられました。

幸い、平成10年頃であったと思いますが、天然記念物ブナ林でブナの結実が見られ、その種子を私の職場の大阪府立農林技術センターに播種し、できた苗木を、大阪府が購入した天然記念物地域の周辺50haに植栽したブナの樹が育ってきています。

今後2,30年はブナ林の存続は可能かと思われますが、昨年や今年のような熱帯以上の高温・乾燥や豪雨が続くようであればブナ林の存続は厳しくなるでしょう。(伊藤記) 以上



雨中で千早園地の大屋根の下で全員集合

【29期生以外の感想】

○先日は、1班で、お世話になり、ありがとうございました。植生などを見るにつけ、もっと早くに金剛山に来ればよかったと思いました。スギとヒノキの植林地の土壌の様子の違いがはっきりとわかる場所もあり、枝の生え方でこのような差が出ることを再認識しました。「クロボク土」のお話がたいへん興味深く、黒い土は、関東方面というイメージをもっていました。また、初めてお聞きした「アカホヤの火山灰」のことと共に、さらに、学んでいきたいと思います。イヌブナの裏のしなやかな毛も初めてさわりました。大切にします。湖北に行くとブナばかり意識していました。今度イヌブナをさがそうと思いました。(27期生 Mさん)

NPO 法人自然と緑 初代理事長・自然大学学長 石原忠一氏を忍ぶ



石原忠一先生は 1980 年に全林野、自治労、教組、環境市民団体が集まり、自然と緑を守る大阪府民会議が結成され、初代議長の和田貞夫氏（前衆議院議員）の後を継いで二代目議長として、北生駒などの無秩序な土砂採取問題や緑化のための苗木配り、自然を楽しむ子供緑陰学級等々、活動の先頭に立って活躍してきました。

私が直接石原先生とお付き合いをさせて頂いたのは、1992 年にマレーシアのサラワク州へ山中さん（故人）や大東さんら 8 名で熱帯雨林伐採状況を調査に行ったときでした。バラム川上流のグヌムル国立公園では事務所で地域の樹木目録を入手して、巨大高木のメングリスの樹高（約 80m と推定）を測定したり、イチジク属の巨木を測定するなど、どのような場面でも研究熱心でした。そのことは、サラワク第二の都市ミリの南方にあるランビル国立公園でも同様でした。

「森がなくなる、守ろう暮らしと地球環境」と題するシンポジウムで実行委員長をされたた大阪市立大学から滋賀県立大学へ招聘された依田恭二先生と幾度となく自然大学立ち上げのため話し合いを行い、私も微力ながら同席させて頂きました。

その結果 1995 年に自然大学を立ち上げることができ、依田先生から推薦して頂いた著名な講師の先生に加えて、金剛山夏緑林生態と豊国崎海浜の生態、昆陽池冬鳥の生態の講師として植物や海浜生物や野鳥に詳しい石原先生に担当して頂きました。

4 年前に立ち上げた自然大学とともに、自然と緑を守る大阪府民会議の活動をさらに発展させるため、社会的な信用も高まるとして法人化を決定、臨時大会を開き府民会議を解散し、1999 年 NPO 法人を立ち上げました。それまで議長であった石原忠一先生が NPO 法人初代理事長となりました。

これまで NPO 法人自然と緑を育て、見守って頂いたことに感謝の意を表します。 合掌

NPO 法人自然と緑理事長 伊藤孝美 記

会報川柳

わたくしの庭です春の河川敷 神崎江

（句意）

野草好きに河川敷はパラダイス。季節ごとの身近な自然を楽しみませんか。

（感想）

私の身近な河川敷を思い浮かべました。（小島 和江）

少しだけ飛んでみようか春だもの 神崎江

（句意）

暖かくなると気持ち弾むようです。花粉だけが飛んでいる世の中はつまらない。

（感想）

春を詠むって蝶の姿を思い出した句かな？（小島 和江）

読めるのに書けぬ漢字がまたひとつ 神崎江

（句意）

昔「書を引く」、今「ググる」。便利さが書き方を忘れるという皮肉を生んでいます。

（感想）

その通り珍しくなくなっている私がいる（小島 和江）

※神崎江（こう）は自然と緑事務局・同自然大学担当

神崎トモ子さんの雅号です。今回は、句の感想を自然と緑理事の小島和江さんにかがいました。小島さんのお庭は大阪市西中島の河川敷。大都会に隣り合う淀川の河川敷には、梅田の高層ビル群を背景に、野草や樹木が生い茂り野鳥がさえずる対照的な光景が広がっています。みなさんも、お近くの河川敷をご自分の庭として楽しまれてはいかがでしょうか。



冬のミズキの枝ぶり

【4ページの答】 左の写真のようにミズキのような木は左のように長枝と短枝という二通りのシュートをつくる。長枝は数cm～数十cmの細長く伸びた茎に葉がついたもので、短枝は枝が数mm～1cm程度と短い寸詰まりの枝で、その短い茎に何枚も、葉をつけることが多い。

機能面から見ると、長枝はあらたな空間へと伸びていく伸長型のシュート、短枝はその場で光を受ける葉面積展開型のシュートと見るこ

とができそうである。仮説として、枝を伸ばしてあらたな空間に進出する役割とその場で葉を広げて光を受ける役割をシュート間で分担するものと考えられる。以上の形態を「階段状分枝」とか「モモタマナ分枝」と言う。



階段状分枝のモモタマナ

自然と緑の活動報告 2025年2月～2025年4月

◇2/13(木)	2月期理事会	14人
◇2/15(土)	斑鳩町 里山整備	12人
◇2/16(日)	自然と緑の自然観察会「大文字山」	29人
◇2/17(月)	近江馬ヶ瀬山ふれあいの森 選木作業	7人
◇2/18(火)	大阪経済法科大学 里山整備	9人
◇2/23(日)	近江馬ヶ瀬山ふれあいの森 炭焼き活動	17人
◇3/1(土)	斑鳩町 里山整備	11人
◇3/2(日)	第29期自然大学「講義・29期まとめ・修了式」	43人
◇3/9(日)	ステップアップ講座「最終講義・修了式」	29人
◇3/13(木)	3月期理事会	14人
◇3/16(日)	近江馬ヶ瀬山ふれあいの森 炭焼き活動	3人
◇3/18(火)	大阪経済法科大学 里山整備	9人
◇3/22(土)	斑鳩町 里山整備(町民招待イベント)	14人
◇3/22(土)	淀川右岸クリーン作戦	3人
◇3/23(日)	自然と緑の自然観察会「元山山口～ 鳴川峠」	23人
◇3/30(日)	河川探訪自然観察会 鴨川探訪「第3回」	26人
◇4/5(土)	2025年度ステップアップ講座 開講式	24人
◇4/6(日)	第30期自然大学 開講式	49人

お知らせ

「NPO 法人自然と緑」のホームページがリニューアルしました。随時最新情報を更新していきますのでぜひ御覧ください。



【寄付等の御礼】

いつもありがとうございます

<切手、ハガキ、現金など>

2/23 寄付 城ノ下夫三枝 様
3/6 寄付 竹村佳子 様
3/6 寄付 小島和江 様
3/10 葉書 中井由美子 様
3/21 寄付 福本繁 様
3/22 寄付 大井幸子 様



ご寄付は下記までお願いします

ゆうちょ銀行口座名：
特定非営利活動法人 自然と緑

口座記号： 00900-7
口座番号： 150942

振込用紙の通信欄に

「寄付」と明記願います。

★編集雑誌
☆五月の古名は「サツキ」で、「皐月」という難しい字を書きます。
☆サツキの語源については、早苗を植える月であることから早苗月(サナエツキ)が早月(サツキ)になったと言われている。
☆しかし、日本の言語学者金田一春彦氏は、サという語のもとには、サオリ・サノボリなど、田の神に関係するものに使われるところをみると、サツキは「田の神の月」の意味に違いない、と述べています。
☆なお、この「サ」が「皐」になったのは神に捧げる稲の意昧があることから、この字があられたと言われています。
☆皐月の別名・異称「悪月」中国では、五月を忌むことの多い月としていること。「仲夏」陰暦では四月六月が夏で、五月が夏の真ん中となる。「雨月」旧暦の皐月は現在の梅雨の時期になるから。「月不見月」梅雨の時期であるため、雨雲で月が見えなくなる。
「稲苗月」五月は早苗を植える時期であること。
他にも「皐月」の異称には「五色月」「建午月」「五月雨月」「写月」「橘月」「梅月」「浴蘭月」などがあります。
(ワンワン)